

# 東京都議会議員の所属会派の方針による 制限の感じ方について

2022年2月16日

## 1. 研究テーマ

エドモンド・バークによる政党の定義の政党とは、国家利益の促進のために、ある共有原理に基づいて統合する人間集団で、単なる一時的利害で結びついた派閥とは区別される、という趣旨のものである。また、モースも、政党を全員が合意したある特定の原則に基づき、共同の努力によって国益を増進するために結ばれた人間の団体とし、全員が合意していることを前提としてあげている。そのため、議員が政党や会派の方針に従うのは当然とも言えるだろう。しかし、それでは個々の議員の存在意義や採決における投票行動の意義を見出すことが難しくなると考えられる。また、必ずしも全ての議員が政党や会派の方針に従っているわけではない。実際、2021年夏に朝日新聞と共同で実施した東京都議会議員選挙のアンケート調査にて、候補者がそれぞれ自分の考えを回答している一方で、特定の会派に所属する議員が記号や記述問題にて全員が一言一句同じ回答をしていた。以上を踏まえて、本稿ではどのような属性を持つ議員が会派の縛りを感じているか分析した上で、会派のまとまり具合を所属議員の属性ごとに比較する。

## 2. 背景

会派の縛りつまり議員の行動に制限を加える最たるものが党議拘束である。齋藤(2003)によると、仮に党議拘束に違反した場合に議員資格が失効になる法律ができた場合、憲法に違反するかどうかで、憲法第43,51条に違反しているとの見解を示していた。日本はほとんどの法案採決に党議拘束を設けている、きわめて党議拘束が強い国である。実際、調査にて「会派に所属として活動する以上、最低限の規則、規定等は必要では」という意見もあった。そのため、議員個人の活動に大きな制約をかけていると考えられている。この論文は憲法の視点から国会議員の党議拘束を見ていたが、議員自身が政治活動に党議拘束による縛りを受けていると感じているのだろうか。

実際の政治においては、党議拘束を外した例として2009年に国会で採決された「臓器移植に関する法律」の改正案の投票が挙げられる。加藤(2010)は、日本共産党を除いた各政党が党議拘束を外したにも関わらず、政党による影響を否定できなかつた。この投票行動では、衆参のねじれや小泉チルドレンの影響を考慮する必要があつたものの、投票行動において共産党の党議拘束の強さのみならず、それ以外の政党も議員にとって準拠集団として捉えられることを確認した。

また築山(2011)も、議員行動の一貫性が所属する政党との関係のなかで、議員の信念、発言、行動のあいだには、常に一定の乖離が生じる余地が存在していると述べている。このことを立証するため、憲法改正問題を切り口に、日本の衆議院議員に対する意識調査・選挙公報・国会議事録の三つの異なる資料から、三層の政策位置を推定することで、その政策位置間を定量的に分析している。そして、実証分析の結果から、政策位置とその一貫性に対する政党の規定力を見出すことができた、と結論付けた。議員が所属する会派によって縛りの感じ方に違いがあるのだろうか。

具体的に、どのような議員属性だと会派の方針に従った行動を取るかは、選挙制度・選挙の勝ち方による。濱本(2015)は、首相の組織統治と議員の造反について分析した。造反を「議員の所属する政党もしくは会派がその方針を決定した後、議員がそれに反する行動を議会、選挙、メディア上で意図的に明示すること(濱本2015, 10)」と定義している。分析によると、1990年前後の選挙制度改革以後から造反が増加していることが確認された。また、選挙制度が比例代表制などの政党に依拠するものになるほど、造反が減少する(一体性が高い)との結果が得られている(Carey, 2007; Morgenstern, 2004<sup>1</sup>)。したがって、当選回数により縛りの感じ方が異なるのではないか。

加えて性別の影響も考えられる。三浦(2019)は、アメリカの研究を例に挙げて、男子の方が成長の過程において圧倒的に団体競技の経験が多いことを否定できなかつたし、この経験の差が、社会においてリーダーを担うか否かに影響を与えていると述べている。従って、性別による団体競

---

<sup>1</sup> 濱本(2015)より

技経験率の違いが、所属会派という一種の団体の一員としての行動に影響を与えうることが考えられる(三浦ほか、2019)。

### 3. 仮説

先行研究によって、都議会議員自身が所属会派の方針に対して縛りを感じているか否かは、議員の所属政党(会派)や政策位置、当選回数に関わりがある可能性が示唆された。本稿では、上記の背景をもとに、都議会議員自身が所属会派の方針に対して縛りを感じているか否かを、以下の5つを要因として仮説を立てた。

一つ目は、各議員の年齢である。先行研究から当選回数の少ない議員、つまり新人である可能性が高い年齢が若い議員ほど縛りを感じると予測できる。また、年齢は新人議員かベテラン議員かの指標にもなりうる。二つ目は、性別である。団体競技経験率が高いとされる男性の方が、団体行動に慣れているために、縛りを感じないと予測できる。三つ目は、所属会派である。所属会派によって、縛りの感じ方に差があると予測できる。本稿では、具体的にどの会派がより縛りを感じているかを示す。四つ目は、イデオロギーである。イデオロギーは、政策位置に関するものであり、議員が持つイデオロギーによって縛りの感じ方に差があると予測できる。五つ目は、当選回数である。当選回数は年齢とも関連が強いと考えられ、当選回数が少ない議員、つまり新人議員ほど、縛りを感じると予測できる。

### 4. データ、変数、分析手法

まず、本稿では東京都議会議員127名(2021年10月調査時点)を対象に行った「津田塾大学中條研究室2021年度第4回東京都議会議員調査」をベースにしている。実施期間は2021年10月8日から2021年11月22日、有効回答数は54<sup>2</sup>、回収率は42.52%であった。

次に変数について、目的変数を「所属会派による縛りを感じるか否か」とし、縛りを感じるを1、感じないを0とするダミー変数を用いて分析した。この変数は、次の質問「所属会派の方針による制限を感じる場面を以下の当てはまるものから全てお答えください。」という問いに基づいて作成している。選択肢は、4つの縛りを感じる事例(選挙活動/インタビューやアンケートに回答するとき/政策を考えると/支持者に活動報告をするとき)と、感じていない、その他である。また、以下の表1は、この問いに対する回答状況をまとめたものである。

表 1: 所属会派による縛りの回答状況

所属会派の縛り	回答数	割合
有り	17	32.69%
無し	35	67.31%
回答数	52	(欠損2)

説明変数は所属会派、性別、年齢、イデオロギー、当選回数の5つを設定した。一つ目の所属会派について、調査時点での都議会の会派構成は以下の表1-1,1-2の通りである。分析では、無所属を一括りにした。そのほか、カテゴリカル変数でそのまま用いた場合と、特定の会派を1、それ以外を0とするダミー変数を用いた場合の2つのパターンで分析した。

表1-1: 都議会(2021年10月時点)の会派構成

<sup>2</sup> 目的変数である「所属会派の縛り」の回答数は52(欠損2)、説明変数のうち「イデオロギー」の回答数は50(欠損4)である。

会派名	人数
東京都議会自由民主党	33（うち女性4）人
都民ファーストの会 東京都議団	31（うち女性11）人
都議会公明党	23（うち女性3）人
日本共産党東京都議会議員団	19（うち女性14）人
東京都議会立憲民主党	15（うち女性4）人
無所属	6（うち女性5）人
現員	127（うち女性40）人
定数	127人

表1-2: 所属会派と回答状況

政党	議員人数	うち女性	回答数	うち女性
共産党	19	14	16	12
都民ファースト	31	11	15	5
立憲民主党	15	4	9	2
公明党	23	3	5	0
自民党	33	4	3	0
無所属	6	5	6	5
合計	127	40	54	24

表1-3: 所属会派と回答率

政党	全体回答率	男性回答率	女性回答率
共産党	84.21%	80.00%	85.71%
都民ファースト	48.39%	50.00%	45.45%
立憲民主党	60.00%	63.64%	50.00%
公明党	21.74%	25.00%	0.00%
自民党	9.09%	10.34%	0.00%
無所属	100.00%	100.00%	100.00%
平均	53.91%	54.83%	46.86%

二つ目の性別については、女性を1、男性を0とするダミー変数を用いた場合で分析した。性別と回答状況の数・割合に関しては以下の表2-1の通りである。回答数は男性の方が多いが、そもそも都議会には男性議員の方が多いので、回答率で見ると女性議員の回答率は6割、男性議員の回答率は3割と、女性議員の回答率が約2倍になっていることが分かる。また、表1-1,1-2,2-1から女性の縛りが低いのは、共産党議員に女性が多いことが考えられるので、性別をコントロール変数として入れたロジスティック回帰分析が必要なことも見て取れる。

表2-1: 性別と回答率

性別	回答数	回答率
女性	25	60.98%
男性	29	33.72%
合計	54	

三つ目の年齢について、年齢のヒストグラムは以下の表3-1、図3-2である。回答者の中で最年長は69歳であり、反対に最年少は29歳で、その差は40歳になっている。また、回答者の平均年齢は50.3歳、中央値は51歳でありあまり変わらない。

表3-1: 年齢の代表値

	年齢
最大値	69.0
最小値	29.0
平均値	50.3
中央値	51.0

回答者の年齢分布

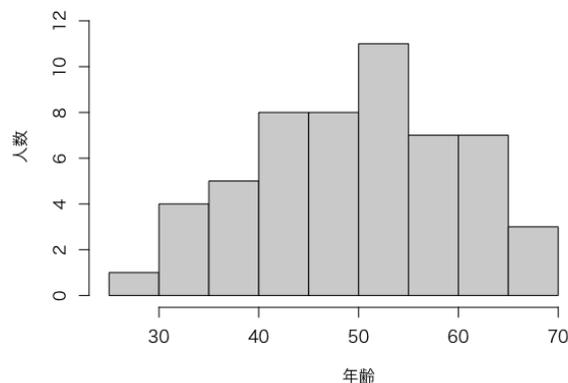


図3-2: 年齢のヒストグラム

四つ目のイデオロギーについて、イデオロギーは、アンケートでは0～10の選択肢を設け、数字はリベラル・左派が0、保守的・右派が10を意味するものを用いた。回答の分布は以下の図4-1の通りである。ただし、分析においては、どれだけ強いイデオロギー的立場であると認識しているかを測るため、イデオロギー軸中央の5を基準とし、左右に行くほど数値が大きくなる指標を作成した。

回答者のイデオロギー分布

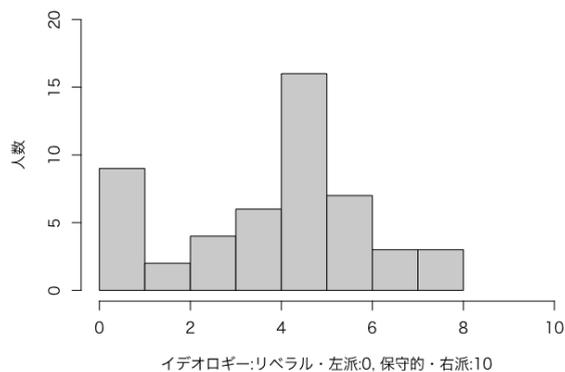


図4-1: イデオロギーのヒストグラム

五つ目の当選回数について、当選回数のヒストグラムは以下の表5-1、図5-2である。回答者の中で最も多く当選している議員の当選回数は8回、反対に最低回数は1回で新人議員を示している。平均当選回数は2.4回、中央値は2回であり、年齢との相関係数は0.526で年齢との一定の関係性が見られる。なお、回答者の年齢と当選回数の散布図は図5-3の通りであり、相関係数は0.526である。

表5-1: 当選回数の代表値

	当選回数
最大値	8.0
最小値	1.0
平均値	2.4
中央値	2.0

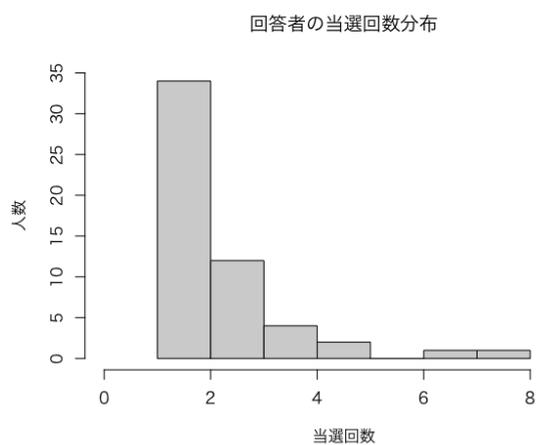


図5-2: 当選回数のヒストグラム



まず、回答の様子から所属会派によって縛りを感じるか否かの意見が分かれていることが見受けられたので、所属会派を説明変数に用いたロジスティック回帰分析を実施した。この時の目的変数は所属会派による縛りを感じるか否か、説明変数は所属会派である。

表a: 所属会派を説明変数に用いたロジスティック回帰分析結果

目的変数：所属会派の縛り			
	偏回帰係数	p値	オッズ比
政党公明	3.045	0.0274 *	21.000
政党自民	-13.927	0.9935	8.9449E-07
政党都民ファースト	2.506	0.0304 *	12.250
政党無所属	1.030	0.4945	2.800
政党立憲民主	2.862	0.0203 *	17.500
切片	-2.639	0.0108 *	0.071
AIC	64.578		

所属会派の縛りと各政党に関係があるか調べる。母集団では回帰係数は0であるという帰無仮説を立てて、ロジスティック回帰分析を行った。説明変数の中では共産党が基準となっている。説明変数のうち、公明党、都民ファースト、立憲民主党のp値は $p < 0.05$ で共産党と比較して有意差が見られ、帰無仮説が棄却され対立仮説が採択される。よって、母集団では回帰係数は0でない。それ以外の政党(自民党と無所属)は $p > 0.05$ で有意差が見られずに帰無仮説が採択される。このことから、共産党を基準とした時に所属会派の縛りと公明党、都民ファースト、立憲民主党に関係があり、オッズ比から共産党から公明党に変わると公明党が1上がると所属会派の縛りのオッズが21倍になる。同じく、共産党から都民ファーストになると所属会派の縛りのオッズが12倍、また、共産党から立憲民主党になると所属会派の縛りのオッズが17.5倍になる。このように、表cの結果からは、共産党を基準とした場合に、公明党・都民ファースト・立憲民主党は所属会派の縛りを感じやすいことが分かった。この分析の基準であった共産党の議員からは、「納得いかない時などはトコトン話し合い理解している」との回答もあり、会派に所属する議員同士で相互理解を深めることが、所属会派の縛りを感じない一因であると推測される。

次に、4種類の説明変数を用いたロジスティック回帰分析を実施した。この時の目的変数は所属会派による縛りを感じるか否か、説明変数は所属会派、性別、年齢、当選回数である。ただし、会派によってそもそもの回答数が少なかったり、性別や年齢・当選回数の偏りがあつたりするので、これらの説明変数をコントロールする必要がある。以下の表bに結果を示す。

表b: 4種類の説明変数を用いたロジスティック回帰分析結果

目的変数：所属会派の縛り			
	偏回帰係数	p値	オッズ比
政党公明	2.6808	0.0817	14.5972
政党自民	-14.0259	0.9934	0.0000
政党都民ファースト	2.4183	0.0518	11.2267
政党無所属	1.1265	0.4800	3.0847
政党立憲民主	2.8195	0.0547	16.7679
性別男	0.3755	0.6556	1.4558
年齢	0.0102	0.8312	1.0102
当選回数	0.0227	0.9496	1.0230
切片	-3.3447	0.2111	0.0353
AIC	70.318		
自由度	9 and 38 DF		

所属会派の縛りと政党、性別、年齢、当選回数に関係があるか調べる。母集団では回帰係数は0であるという帰無仮説を立てて、ロジスティック回帰分析を行った。いずれの説明変数の  $p$  値も  $p > 0.05$  により有意差が見られず、帰無仮説が採択される。このことから、いずれの説明変数も所属会派の縛りとは関係ないと言える。しかし、表a,bを比較すると、イデオロギー無しの表bからは公明党、都民ファースト、立憲民主党の $p$ 値が0.1を下回ることが分かり、所属会派と縛りがやや関係することが見て取れる。また、モデルの当てはまりの良さを示すAICについては、表a,bともに値がほとんど変わらず、モデルの良し悪しに差がないことが分かった。

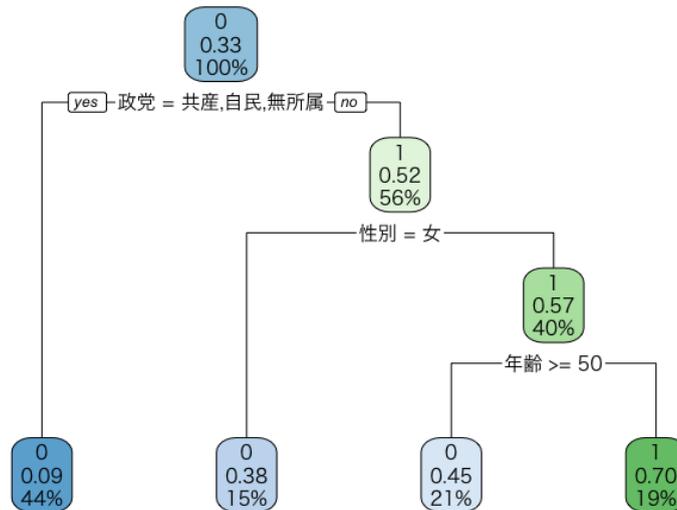
続いては、イデオロギーも含めた5種類の説明変数を用いたロジスティック回帰分析を実施した。この時の目的変数は、所属会派による縛りを感じるか否か、説明変数は所属会派、性別、年齢、イデオロギー、当選回数の6種類である。分析結果は表a~c, 図d,eの通りである。

表a: 5種類の説明変数を用いたロジスティック回帰分析結果

目的変数：所属会派の縛り			
	偏回帰係数	p値	オッズ比
政党公明	2.0580	0.195	7.8297
政党自民	-14.3500	0.2340	0.0000
政党都民ファースト	2.1210	0.9930	8.3384
政党無所属	0.8757	0.1390	2.4006
政党立憲民主	2.4310	0.6030	11.3711
性別男	0.3071	0.1120	1.3594
年齢	0.0019	0.7180	1.0019
イデオロギー	-0.1629	0.9720	0.8497
当選回数	0.1590	0.6380	1.1723
切片	-2.6050	0.3480	0.0739
AIC	70.100		
自由度	9 and 38 DF		

所属会派の縛りと政党、性別、年齢、イデオロギー、当選回数に関係があるか調べる。母集団では回帰係数は0であるという帰無仮説を立てて、ロジスティック回帰分析を行った。いずれの説明変数の  $p$  値も  $p > 0.05$  により有意差が見られず、帰無仮説が採択される。このことから、いずれの説明変数も所属会派の縛りとは関係ないと言える。

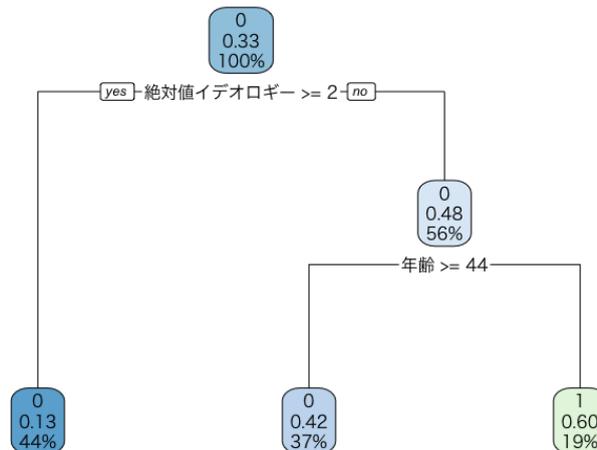
続いて、所属会派以外の細かい条件分岐を見るために、決定木分析を行った。以下の決定木分析の目的変数は所属会派による縛りを感じるか否か、説明変数は所属会派、性別、年齢、イデオロギー、当選回数である。



図d: 5種類の説明変数を用いた決定木分析結果

所属会派が公明党・都民ファースト・立憲民主党のいずれかであり性別が男性であるかつ年齢が50歳未満の人が全体の19%で、そのうち70%が縛りを感じているので所属会派の縛りを感じている人に分類できる。一方、所属会派の縛りを感じない人は、所属会派が共産党・自民党・無所属である人が全体の44%（うち9%が縛りを感じる人）。また、所属会派が公明党・都民ファースト・立憲民主党のいずれかであり、性別が男性である人でも50歳以上の人は縛りを感じず、全体の21%を占める（うち45%が縛りを感じる人）。所属会派が公明党・都民ファースト・立憲民主党のいずれかであり、性別が女性の場合は全体の15%（うち38%が縛りを感じる人）が縛りを感じていない。このことから、所属会派が公明党・都民ファースト・立憲民主党のいずれかであり、性別が男性、また、年齢が50歳以下で比較的若手議員の場合に、縛りを感じている傾向があることが分かった。

上記の決定木分析に加えて、説明変数の所属会派を共産党を基準とした決定木分析を実施した。この時の目的変数は所属会派による縛りを感じるか否か、説明変数は所属会派（共産党を1、それ以外を0とするダミー変数を用いた。）性別、年齢、イデオロギー、当選回数である。



図e: 所属会派でダミー変数を用いた場合の決定木分析結果

イデオロギーが2未満であり年齢が44歳未満の人が全体の19%を占めており、うち60%が縛りを感じる人だから、所属会派の縛りを感じている人に分類できる。一方、所属会派の縛りを感じない人はイデオロギーが2以上である人が全体の44%（うち13%が縛りを感じる人）。また、イデオロギーが2未満であり年齢が44歳以上の人全体の37%で縛りを感じていない（うち42%が縛りを感じる人）。このことから、イデオロギーが2未満つまり中道派の人や年齢が44歳未満と比較的若い人が縛りを感じやすいことが分かった。加えて、表a~cまでの回帰分析では政党しか有意にならずに判断材料が少なかったが、図d,eの決定木分析の結果からは、性別や年齢、イデオロギーによる違いも見てとれた。

## 6. 結論と含意

本稿では東京都議会議員に対して行ったアンケート調査をもとに、どのような属性を持つ議員が所属会派の縛りを感じているかを、ロジスティック回帰分析と決定木分析で調べた。

まず、各議員の年齢と所属会派の縛りの関係については、決定木分析の結果から、50歳未満の中堅から若手に分類される議員が縛りを感じやすい傾向にあることが分かった。仮説では、年齢が若い人ほど縛りを感じやすいと予想していたが、若さと縛りの感じ具合に強い相関があるわけではないことが明らかになった。

次に、性別については男性の方が縛りを感じないという仮説に反して、縛りを感じると答えた女性が20%程度、男性が48%程度と、男性の方が縛りを感じやすいことが明らかになった。決定木分析からも、男性の方が縛りを感じやすいことが読み取れた。

加えて、所属会派については、会派によって縛りの感じ方に差があると予想し、共産党に所属する議員が縛りを感じにくく、公明党・都民ファースト・立憲民主党の議員が縛りを感じている傾向にあり、会派によって差があることが示された。ただし、表1-2にある通り自民党議員の回答数が3で母数が少なく、自民党についてはあまり正確な分析が出来なかったことに留意する必要がある。

続いて、イデオロギーについては、議員が持つイデオロギーによって、縛りの感じ方に差があるとの仮説を立てたが、決定木分析においてイデオロギーが2以上、つまりリベラル・保守のいずれかに考え方が寄っている議員であるほど縛りを感じにくい結果がでた。これは、共産党議員が絶対値に換算したイデオロギーにおいて2以上の回答をしている人が多いことに由来すると判断できる。

最後に、当選回数については当選回数が少ない議員ほど縛りを感じると予想していたが、今回の調査では当選回数と縛りの感じ具合には関係がないことが分かった。ただし、濱本(2015)の研究からは、比例代表制という政党の影響をより強く受けるとされる議員の党議拘束が強い影響

を与えていることが明らかになっているため、本稿の結果が全ての議員に当てはまるわけではないことに注意する必要がある。

今回の調査では、若手から中堅議員及び男性議員がより所属会派に縛りを感じやすいことが分かった。また、自民党や公明党の回答数が少ないことに留意する必要があるものの、中道のイデオロギーを持つ人ほど所属会派への縛りを感じやすいことも新たな知見であった。イデオロギーを強固に持つ人たち同士で集まるほど、団結力も高まることが伺える結果となった。今後は、実際に縛りを感じている議員の投票行動を調査するなど、所属会派がどのくらい準拠集団として機能しているか分析する必要があると思われる。

## 参考文献

Carey, John M. "Competing Principals, Political Institutions, and Party Unity in Legislative Voting." *American Journal of Political Science* 51, no. 1 (2007): 92–107.

Morse, Anson D. "What Is a Party?" *Political Science Quarterly* 11, no. 1 (1896): 68–81.

加藤 英一、2010、「改正臓器移植法をめぐる投票行動」『北里大学一般教育紀要』15 巻 p. 111-131

齋藤 康輝、2003、「議員の党籍変更と議席喪失についての憲法的考察」『法政論叢』40 巻 1 号 p. 166-176

築山 宏樹、2011、「政策位置の多層構造 憲法改正問題を事例として」『公共選択の研究』2011 巻 57 号 p. 46-58

濱本 真輔、2015、「首相と党内統治 人事と造反」『選挙研究』31 巻 2 号 p. 32-47

三浦まり・高橋恵子・金子雅臣・大塚雄作、2019、「ハラスメント防止委員会企画講演：ジェンダー・クォータ(性別割り当て)とハラスメント——政治学と心理学の架橋——」『教育心理学年報』第58集 pp. 330-350